

独自の取り組みで、成績を向上

10年ほど前まで農場内で豚サーコウイルス2型感染症(P CV2)や豚マイコプラズマ性肺炎(MPS)が蔓延し、なかなか断ち切ることができない状況が続きました。くみあい飼料の担当者からの勧めもあり、スリーセブン方式を導入。分娩率が前年と比較して1.3%向上した要因として、種付けストール上部に設置しているLEDライトを夕方から翌朝まで点灯していること、ストール前を雄豚が自由に歩けるようにしていること等が挙げられます。また、分娩舎では週1回ボディコンディションスコアをチェックし、最適なスコアでの離乳を心がけています。今後は、これまでの知識と経験を活かして新しいことにも挑戦していきたいです。

株式会社フカサワ
代表取締役 深澤 重史さん(秋田県)



飼養規模 母豚300頭 一貫経営

母豚は目標のボディコンディションスコアを目指し、給餌量の調整を個体ごとに細かく行っています。また、過去に受胎率が低下した時の対策として最も効果的だった通路の水洗いを現在も徹底して行っています。許容確認は担当者全員で行い、個人ごとのレベルアップを目指しています。「母豚や子豚への細かな管理に時間を割くこと」「衛生管理を怠らないこと」という意識を持って、できる限りのことを行っていることが好成績の維持につながっていると思います。今後も新たな知見を試していきたいです。

JAさが天山ファーム
場長 内川 浩一さん(佐賀県)



飼養規模 母豚920頭 一貫経営

種豚の性能を十分に発揮させることを目的に、廃用基準の策定による母豚の産歴構成の適正化を行いました。そのほかにも、母豚の育成期間を長めに設定し、しっかり骨格づくりをするなどして繁殖成績の安定化に取り組みました。また、月ごとの目標と成績を事務所の壁に掲示し、従業員が自農場の成績を把握、意識するようにしました。現在はコロナ禍で中止していますが、毎月検討会を行っているほか、外部とも連携して積極的に情報交換を行っています。こういった取り組みの積み重ねが現在の成績につながっていると思います。

有限会社阿賀北ファーム
代表取締役 齋藤 幸さん(新潟県)



飼養規模 母豚1,750頭 一貫経営および2サイト

初回種付けまでにブドウ糖を与えることで、初回および生涯の繁殖成績が向上しました。また、分娩前の母豚に繊維を給与していること、日中に分娩を集中させるなどして介助体制を整備したことが死産率の低減につながりました。母豚の泌乳能力向上と虚弱豚対策として、妊娠中期の給与管理体系の見直しを行ったほか、里子の徹底やMWFを活用して1頭でも多く確実に育てています。今後も引き続き、さまざまなことに取り組み、その成功要因を分析することでさらなる成績向上を目指します。

鹿児島県経済連高山大規模養豚実験農場
場長 下之門 和也さん(鹿児島県)



飼養規模 母豚700頭 一貫経営

ハイコープ種豚の能力を最大限に引き出す管理について

NEWS
11月19日

第15回全農養豚セミナー

2021年11月19日に「第15回全農養豚セミナー」が開催された。

前回に続いてオンラインでの開催となったが、特別講演や優良農場の紹介を通じて、

今回のテーマである「好成績を維持する際のポイント」について

貴重な知見を共有する機会となった。



JA全農畜産生産部 推進・商品開発課 三浦康治課長



JA全農畜産生産部 由井琢也部長

※Web PICS(くみあい養豚生産管理システム): JA全農が提供しているクラウド型養豚生産管理システム。導入、種付け、分娩、哺育、離乳、廃用、へい死、出荷等を入力する事で、母豚の繁殖成績や農場全体の成績を把握できる。

Web PICS※の集計概況や優良農場の取り組みなどを発表
今回で15回目となる本セミナーには、全国から約130名が参加。開会にあたり全農畜産生産部の由井琢也部長は「鳥インフルエンザ、豚熱(CSF)が全国的に広がっている。本セミナーが生産性向上、防疫の一助となれば」と挨拶した。

はじめに、2020年Web PICS集計結果(集

特別講演

「消毒の基礎と現場で効果的に使うポイント」

世界各地で、口蹄疫やアフリカ豚熱(ASF)、豚熱(CSF)が発生しており、日本でも、野生イノシシによる豚熱感染が2018年から継続的に報告されています。

こうした家畜伝染病の発生状況を受けて、2020年度に飼養衛生管理基準が改正されました。特に、交差汚染防止などの「消毒」について具体的な記載が加わりました。国内の鳥インフルエンザの発生状況や、豚熱のワクチン接種済みの農場で豚熱発生が確認されていることをふまえ、今年度更に改正されました。このような情勢の中、「消毒」の考え方・実践方法がより重要に

(株)科学飼料研究所
動薬部北九州事業所
清水 紘子所長補佐



計対象期間: 2020年1月~12月を報告した(本誌134号で掲載)。続いて、株式会社科学飼料研究所動薬部北九州事業所の清水紘子所長補佐が「消毒の基礎と現場で効果的に使うポイント」をテーマに講演。全国から選出された成績優良な4農場の事例紹介では、各農場の取り組みを動画で紹介し、質疑応答も活発に交わされた。

全農畜産生産部の三浦康治課長は閉会の挨拶で「産肉量の増加は生産者の皆さまの努力によるもの。来年はオンラインではなく、対面で実施したい」と述べた。

なっています。

消毒は、成績向上の重要な手段です。農場の課題を把握し、適切な消毒薬を適切な方法で使用すれば、最終的には農場の収益増加につながることができます。農場の汚染レベルは、洗浄→乾燥→消毒→乾燥→石灰塗布→乾燥の順に下がります。そのため、消毒の効果を最大限に発揮するためには、徹底した洗浄を行うことが大切です。洗浄が不十分な場合、有機物が残り、消毒薬が浸透しません。洗いにくいところ、消毒しにくいところほど汚染されている可能性が高いので、重点的に洗浄、消毒を行ってください。

また、多くの病原体は乾燥に弱いため、空舎期間スケジュールを立てる際にも、乾燥の期間は減らさないようにしましょう。

日々の防疫対策として、手洗いや着替えは有効です。加えて、シャワーも非常に強力な防疫の手段です。外部訪問者の対策として、全身を覆うような感染症防護対策キットの活用もお勧めします。

